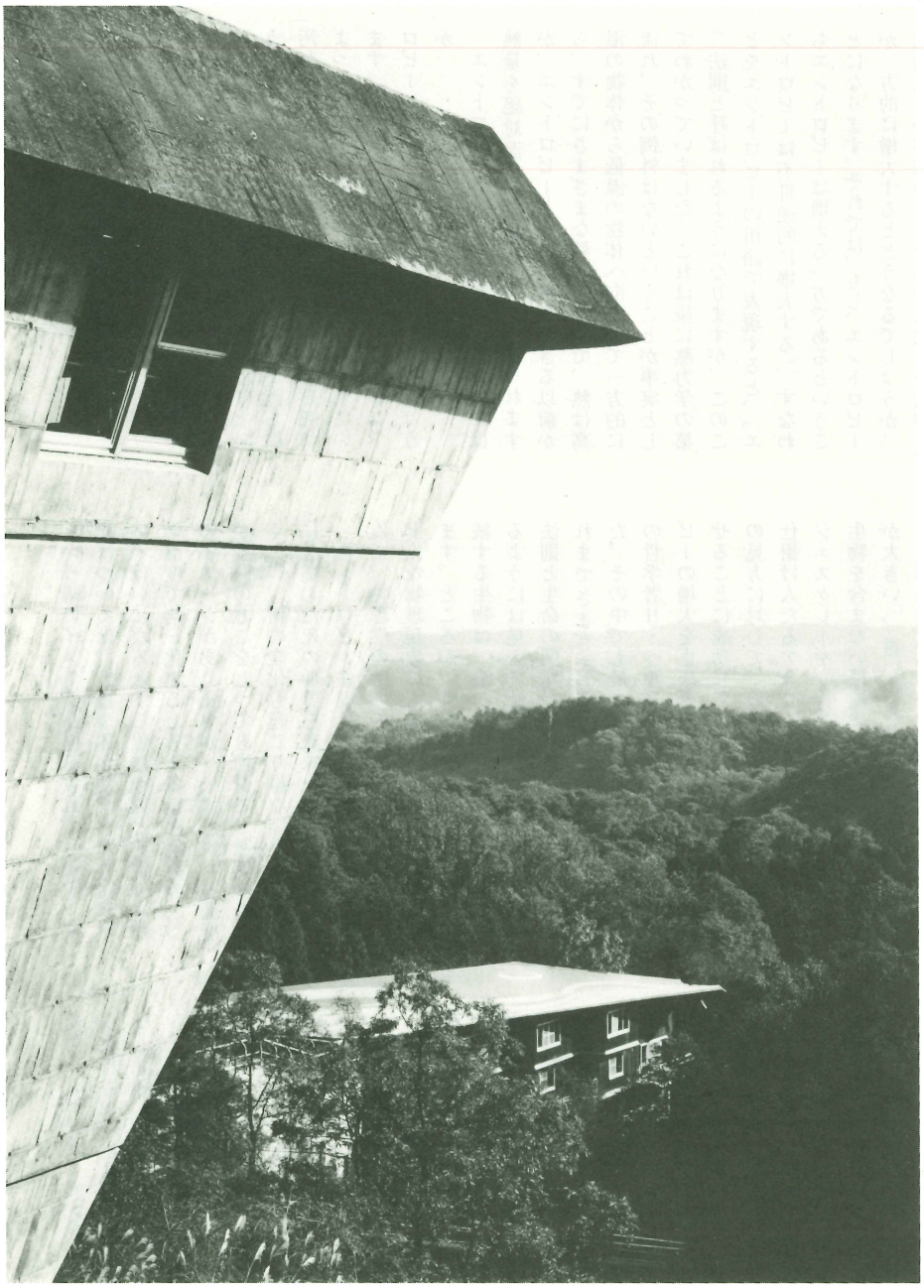
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'86春



=第134回大学共同セミナー=
●エントロピーなしで生きられるか

=第8回大学合同セミナー=
●東京の都市景観

=第12回国際学生セミナー=
●海外体験をどう活かすか

Plain living and high thinking

No.102

第134回大学共同セミナー●全体講義より

エントロピーの概念と新展開

一橋大学経済学部助教授　室田　武

エントロピーは現代の妖怪か

エントロピーという言葉は、一八六五年ドイツの物理学者ルドルフ・クラウジウスによって作られました。このエントロピーという名の現代の妖怪に触れると、万物が直ちに汚れ、それを祓わなければ、いつかは熱死によってすべてが終わってしまうと言われています。私たちは一体どのようにして、エントロピーによる汚れを祓ったらよいのでしょうか。

エントロピーという物理量は、具体的には熱量を絶対温度で割算した形で得られますが、エントロピーという言葉ができる以前から、すでにさまざまな熱現象の中で、熱は高温の物体から低温の物体へ向かって一方的に流れ、その例外はないということが事実としてわかっていました。これは後に熱力学の第二法則と呼ばれるようになりますが、このことをエントロピーの用語で表現すると、「エントロピーは不可逆的に増大する」、すなわちエントロピーは増える一方であるということになります。それでは、もし、エントロピーが一方的に増大するとどうなるでしょうか。太陽系とか宇宙のような非常に大きな広がりの中で考えると、結局あらゆる物は、最終的には、エントロピー最大の状態に行きつくことになります。クラウジウスも「世界ないし、宇宙のエントロピーは最大値に向かって増大する」と言っています。そこでは、エントロピーがある最大値に達すると、最後には熱的な死（heat death）の状態が到来するだろうという暗いイメージが提示されています。熱死については、宇宙全体が文字どおり廃熱でいっぱいになるとする焦熱地獄と非常に冷たい温度で均一化すると考える極寒地獄の二つのイメージがありますが、いずれにしろ温度が空間のどこをとっても均質で、温度差の全くない、何の変化も起こり得ないような完全に沈黙した死の世界を意味しています。

エントロピー法則は、万有引力の法則と並んで、物理学の中でも最も普遍的な法則で、どんな物理現象にもあてはまると言われています。ところが、世代の交代を繰り返して存続する生物は、決して熱的な死に向かっているようには見えません。そこで、エントロピー法則と生命の問題の和解点を見出すべく、これまでさまざまな意見が提出されてきました。その中でも最も有名な見解は、フランスの哲学者H・ベルグソンの、生命はエントロピーの増大を止めることはできないが、遅らせることに成功しているというものです。この見方に対して、近年のエントロピー論争の仕掛け人たるアメリカの経済学者N・ジョージェスクレーゲンは、「生物を含む環境は、生物を含まない環境よりエントロピーの増大が大きい」、言い換えれば、「生物はエントロピー増大を加速する」として、根底的な批判を投げかけました。

従来の考え方では、エントロピーの増大が、すぐに熱的な死という暗いイメージと結びつけられていたために、なるべくエントロピーが増えないような状態がいい、あるいはエントロピーなしで生きられればそのほうがいいと考えられてきました。しかし、ジョージェスクレーゲンは、エントロピーという妖怪から逃れるすべがない以上、むしろエントロピーが増えることを率直に認めるところから、議論を出発させているのです。「エントロピーなしで生きられるか」と問われれば、やはり、私たち一人一人は、エントロピーが増えることによって生きていると言わなければならないわけです。

「エネルギー革命」にエントロピーの捨て場はあるか

ただ、ここで問題になるのは、エントロピーが増えっ放しだと困るということです。いろんな活動をして、体内に増えてくる廃熱とか廃物が溜るだけで、捨てられなくなったら、私たちは病気になってしまいます。元気で健康な人は、増えるエントロピーを呼吸、発汗作用、排尿などの形で体外に捨てています。尿毒症という病気が命取りになるのは、結局、老廃物が体外に捨てられなくなるからです。

そうすると、問題の本質は増えるエントロピーをどうやって捨てるのか、またどこに捨て場があるのかということになります。現在では、内燃機関の発明により、経済活動の中に石油の自己拡大再生産のメカニズムがビルト・インされています。日本の場合、この石油文明の確立過程で、「燃料革命」とか「エネルギー革命」という名の下に、薪や木炭などが使われなくなりました。さらに、オイル・ショック以降、石油に代わる新しいエネルギー源として、原子力の利用が叫ばれ、原子力が未来の救世主のように考えられるように

①雑木林に炭焼きの煙が流れる
②炭材を並べる――伏焼き
③ステンレス製の移動炭化炉
④炭出し――ドラム缶を改良した簡易がま
⑤「炎の文化」の守り手・杉浦銀治氏（左）と運営委員・江沢洋氏

なってきました。ところが、エントロピーの捨て場の問題から考えてみると、原子力発電によって出てくる核廃物は、どのようにしても捨て場がありません。原子力はこれまで随分拡大してきていますが、このような基本的問題点を抱えているために、今後どこまで拡大し得るのか、前途には大きな壁が待ち構えていると言わざるを得ないのです。

水と土を生かす

ところで、薪や木炭は、よく更新性資源とか再生可能資源と呼ばれています。森羅万象がエントロピーの最大値に向かって、一方的に展開してゆくというのに、更新とか再生はこのことに矛盾するのではないでしょうか。この点に関して、新しい見方を提起したのが、理化学研究所の槌田敦さんです。槌田理論によれば、更新可能なものが地上に存在する理由を解く鍵は、水と土にあります。太陽光も一定の温度を持つ以上、何らかのエントロピーを持っています。したがって、もし地上に廃熱が溜る一方だと、地球全体が熱地獄になってしまいます。ところが、地球には水があるので、溜ってしまうはずの廃熱が水に吸収され、水蒸気となり、気圧の低い上空で、冷えて氷滴になる時に、この廃熱を長波長の輻射を通じて、大気圏外に捨ててしまうわけです。その場合、水だけでなく、空気の対流も天と地の循環を通じて似たような働きをして、熱エントロピーを地球の大気圏外に捨てています。地球では誰もが日常的に目にしている水循環が、エントロピーの汚れを祓うために決定的に大きな役割を果たしているのです。

他方、いろいろな廃物類については、どうでしょうか。廃物は土にかえされることによって、無数の土壌微生物が餌として食べ、最終的には、無機物と廃熱に分解されてしまいます。廃熱は、水循環の中で処分され、無機物の方は地上の植物が再摂取して、生育するわけです。地球自身もエントロピーという妖怪に取り付かれているわけですが、このようにして、廃熱と廃物をうまい具合に処理する仕組みを、本来備えているのです。エントロピーは決して増えたら困るものではなく、むしろ増えることによって私たちは生きている。そして、生きることによって増えたエントロピーを祓う儀式の祭主が、地球の水と土であるというわけです。

現代の文明は、石油の余りにも便利な力を利用し、その中から原子力発電や核兵器を生み出してきました。それらは日常的には、必ずしも危険とは感じられないかも知れませんが、一見便利で豊かに見える社会の背後に、人間社会だけでなく、生態系全体の存続を脅かすような爆弾を抱え込んでいるのではないでしょうか。最近のアメリカでは、林業が盛んになり、薪や木炭を使う企業や家庭が非常に増えています。一九八〇年代に入り、薪の消費量がカロリーベースで、原子力発電の二倍にも達しているほどです。薪炭が原子力の一〇〇分の一程度にまでおちこんでしまっている今日の日本ではとても信じ難い話ですが、そういう新しい状況も着実に起こってきているのです。私たちが、さまざまな問題点を抱え込む石油・原子力文明を、もし超えようとするならば、エントロピー法則に則って、水と土を生かす形で、将来の経済、文化、社会をもう一度考え直してみることに大きな意味があるのではないかと思います。石油や石炭の消費を明日からゼロにしようなどと提案するつもりは全くありませんが、炭を焼き、水車がめぐるといった生活は、決して過去の遺物扱いされるべきでなく、むしろ未来を拓く鍵の一つだというふうにみていったらどうでしょうか。

（文責・編集者）

第134回 大学共同セミナー

＝主題＝ エントロピーなしで生きられるか

期　日
'85.12.13～15

▼全体講義「エントロピーの概念と新展開」
一橋大学経済学部助教授　室田武氏

▼講話・炭焼き指導「生きるための炭焼き」
前農林水産省林業試験場
木材炭化研究室長　杉浦銀治氏

▼セクション演習

A　エントロピー論争
理化学研究所研究員　槌田　敦氏
学習院大学理学部教授　江沢　洋氏

B　生産・消費とエントロピー――経済学における生産・消費VS生活者の生産・消費――
千葉大学法経学部教授　中村達也氏

C　生物圏におけるエントロピー経済
前農林水産省林業試験場
木材炭化研究室長　杉浦銀治氏
一橋大学経済学部助教授　室田武氏

▼シンポジウム

Ⅰ　水と土と太陽と
（略）　槌田　敦氏
（略）　杉浦銀治氏

Ⅱ　くらしと汚しとエントロピー
埼玉大学教育学部教授　暉峻淑子氏
（略）　中村達也氏

Ⅲ　考えることの熱力学――情報エントロピーと物理エントロピー――
東京大学経済学部教授　竹内　啓氏
（略）　室田　武氏

▼運営委員
学習院大学理学部教授　江沢　洋氏
一橋大学経済学部助教授　室田武氏

▼参加者　54名（内女子6名）
早稲田（8）、筑波（6）、信州（5）、東京（4）、同志社（3）、千葉・東京農工・慶応義塾・中央（各2）、東京工業・横浜国立・明治学院・上智・津田塾・東京理科・明治・立教・日本（各1）、その他（11）、以上18校

◇

エントロピーという言葉は、今や現代文明を読み解くキー・ワードの一つとなった感がある。自然現象と社会現象の間に橋を架けようとするこの概念をめぐって、現在、物理学、経済学、社会学などの分野を中心に、ホットな論争が巻き起こっている。この論争の背後には、地球大規模で急速に拡大する環境汚染やエネルギー危機の問題が潜んでいる。地球を一つの運命共同体と見なす「宇宙船地球号」の発想に立てば、先進工業国の達成した「豊かな社会」は、今やその基盤から動揺を見せ始めている。生産力至上主義を掲げて、「走り続けなければ」生きてゆけなくなってしまったわれわれは、いつしか底無し沼に足をとられた巨人さながら、不可避的に沈み込んでゆく他はないのか。

「エントロピーなしで生きられるか」という問いは、日々深刻化している現代文明の危機的状況に対する、今日の学問からの真摯な問いかけである。それは、自然科学と社会科学の既成の学問的枠組を越境しつつある新たな知の共同探求の在り方を示唆している。エントロピーとはそもそも何か。エントロピーという概念を用いると何が新たに見えてくるのか、またそれはほころび始めた現代文明の突破口を開くことができるのか。エントロピーの正体を見極め、エントロピーからの発想を基軸に、現代文明に対する見方を組み換える。それが、セミナーに課せられた課題である。

この企画は年来の懸案であったが、幸いにも、近年この問題に対して経済学の立場から精力的な発言を行なっておられる室田武氏と理論物理学の碩学江沢洋氏が運営委員をお引き受け下さることによって実現することとなった。この誌上を借りて両氏のご尽力に対し、改めて謝意を表しておきたい。

◇

セミナー・ハウスは、雑木林に囲まれた豊かな自然環境の中に位置している。今回は、エントロピーという言葉を一人歩きさせないために、プログラムの中に、この雑木林を有効に利用した仕掛けが設けられた。長年木炭の研究をされてきた杉浦銀治氏のご指導により、全員が参加して、炭焼きの体験実習を行なったのである。

セミナー初日、登録を済ませた参加者は、大学院セミナー館裏手の林の中に集合。炭材は雑木林に自生するコナラを調達。すでにハウス職員の手によって一ヵ月前に間伐されて〝葉枯し〟がすんでいるものを指示どおりのサイズに切り分ける作業から着手した。薪や木炭は有史以来、人間と共に存在してきたエネルギーであるが、日本では、一九六〇年代の「燃料革命」の過程で、これら「自然の火」は切り捨てられてしまった。氏によれば、その結果、世界に誇る炭焼き技術が急速に失われつつあり、今伝承されなければ、日本の「炎の文化」は永久に絶たれてしまうという。

今回は、なるべく身近な道具によって、製炭技術を伝授したいとの氏の計らいで、ステンレス製の移動炭化炉、ドラム缶を改良した簡易がま、人類が火を使い始めた頃から行なってきた最も簡単な伏焼きの三つの方法がとられた。「あせらずにのんびりやるのが炭焼きのコツ」であり、良い炭を焼くためには、どうしても自然の要求するリズムに従わなければ

●シンポジウムⅠ～Ⅲの発言から

エントロピーとエコロジー

槌田　敦

エコロジー運動は「自然に帰れ」と主張してきたが、私はエントロピー理論からエコロジーの主張が、基本的に正しかったことを証明したいと思っている。

エントロピーを日常的な言葉で言い換えると「汚れ」が最も近い。活動してエントロピーが増大するということは、「汚れ」が増えることだ。ところが、地球は絶えず活動を行なっているにもかかわらず、ほとんど定常的で、エントロピーが増大しているようには見えない。エントロピーを捨てるには廃熱と廃物の二通りのかたちがあるが、地球は水循環を利用して、余分の熱エントロピーを大気上空で宇宙へ捨て、地上で生じた廃物は、生物循環（エコサイクル）を通じて分解し、廃熱に変えて、系外へ捨てているのだ。

現代の石油文明は、遠距離輸送と地下資源の利用によって、生物循環を破壊し、取り返しのつかない汚染を発生させてきた。エントロピー理論によって生存の条件が明らかになった以上、人間は、人間を含めたより豊かな生物環境を取り戻さなければならない。

暮らしをとらえる経済学

中村達也

これまで主流にあった経済学の枠組の中では、本当の意味で暮らしや汚しの問題が見えてこないと思う。マクロやミクロ理論の中の「国民」や「消費者」という言葉には、実際に日々生活を営んでいる人間がこぼれ落ちている。従来の経済学は、人間の経済活動を可逆的な次元で捉えてきたが、環境汚染のように、コストをかけても元に戻らない問題には目を向けてこなかった。

一九七〇年代から現在までの十数年は、経済学二〇〇年の歴史の中でも大変重要な時期であった。一九六〇年代の「効率性」を中心概念とする新古典派総合に代表される経済学に対し、エントロピー論を含めて、それまで「異端」とされていた経済学の周縁から相次いで問題提起がなされてきたからだ。経済学はこれまで、人間や自然のさまざまな側面を切り落とし、単一の数量に還元できる範囲内で理論を体系化してきたが、これからの課題は、日常生活の視点から、暮らしや汚しなど異質とされてきたものをどう組み込んでゆくかということである。その時エントロピー概念が一つの重要な鍵になる。

「経済原則」と「社会原則」

暉峻淑子

人間は他の生物と違い、自然に働きかけて、生きてゆくための消費物資を得ている。この活動が経済行為と呼ばれるもので、経済学の根本は、人間がいかに生きてゆくかということに収束されてくる。

普通、「経済的」とは、最小の浪費で最大の効果を上げる「効率性」のことを指しているが、人間生活の中には、子育てや家族生活のように、効率性を追求せずに、人間関係を楽しみたいという欲望もある。このような関係は社会原則と呼ばれ、ものを作る場合の経済原則と相補って、人間社会が支えられている。

ところが、現代社会の抱える大きな問題は、この二つの原則が敵対関係に立ってしまっていることである。本来ならば、効率性は、時間的、社会的な広がりの中で求められねばならないのに、個の立場に立った効率性が優先されている。皆が破滅しないためにも、「他を豊穣にするならないという。「生きるための炭焼き」と題された講話の中で、氏は、何もかも目まぐるしく動く現代文明の中にあって、自らの体を使って「じっくりと燃焼させてゆく」体験の貴重さを強調された。すべての「モノ」が既製品としてあてがわれる現代産業社会の中にあって、「生き方としての炭焼き」は最初から最後まで参加して「もの」を生み出してゆく労働の初源的喜びを教えている。完成した木炭の塊りを手にするまでには、最終日の昼まで待たなければならなかったが、日常生活では経験することのできない貴重な炭焼き実習を通し、参加者一人一人は自らの手でエントロピーを掴み取ることができたことであろう。

（次頁第1段につづく）

◇

プログラム二日目は、午前と午後にわたり、エントロピーを物理学、経済学、情報理論など複数の視点から捉えるための三つのシンポジウムが開かれた。最初に、シンポジウムⅠで、杉浦氏が、水と土と太陽に「緑」を結合させるべく、スライドを用いて、炭焼きと木炭について詳説。日本の高度な炭焼き技術に支えられた各種の木炭製造の過程、世界各国の炭焼きの現況、灰や煙までも利用した木炭の多目的用途について、興味深い事例を紹介された。参加者は、改めて水と土を媒介とする人間と木炭との「共生」関係の重要さを認識させられた。

シンポジウムでは、各講師がそれぞれ約三〇分間の発題を行ない、その後で、フ

ことによってしか、自らを豊穣にすることはできない」という生物界の掟を忘れてはならないと思う。

情報理論と物理エントロピー

室田　武

エントロピーという概念が意味のある場合とない場合がある。例えば、ふつう不確実さの程度をどれだけ減らしたかで定義されている情報エントロピーは、熱量と絶対温度から得られる物理次元を持った量である物理エントロピーとは明らかに異なった次元にある。

私が懸念しているのは、社会の中に情報エントロピーを注入することによって、あたかも物理エントロピーをいくらか減らせるのではないかという心理的風潮が生じていることである。特に最近、情報化社会が喧伝され、情報という言葉が氾濫しているが、情報エントロピーは、処分し切れない物理エントロピーの増加分を打ち消すことができる「打ち出の小槌」だという思い込みが社会心理としてある。情報エントロピーという概念を乱用すると、一種の幻想をふりまくことになり、全く物理的次元を持たない情報量をエントロピーという言葉で呼ぶのは、明確になっている問題を故意に混乱させ、見当違いの議論を引き起こす可能性がある。

情報化社会とエントロピー

竹内　啓

ある概念を使う時には、自分がどのレベルで使っているかということを明確にしておかなければならない。物理学上、非常に明確な概念であるエントロピーも社会現象に適用する時は、多分に一人歩きする危険がある。

私の考えでは、情報エントロピーと物理エントロピーとは、やはり同じものであり、情報化がエントロピー増大の法則に何らかの意味で抵抗できる側面を持つということを否定する必要はないと思う。

情報とは、エネルギーの流れ方やエントロピー増大の仕方を方向づけるもので、エネルギーやエントロピー利用の効率化と結びついている。

私が言いたいのは、社会が情報化してゆく時には、社会の発展とエントロピー増大とは正比例しないで済むということであり、エントロピー問題においては、情報化によって、解決しうる点があるということを強調しておきたい。

ロアーを交えて自由に討論を交す形式がとられた（各氏の発題内容については、別掲要約を参照）。

各シンポジウムでの自由討論は、いずれも参加者の積極的な発言に支えられ、終始活況を呈した。それぞれの学問分野での知の組み換えに深く関わる諸氏の問題提起に対し、フロアーからは、さまざまな意見や疑問が提出されたが、各討論の基底を一貫して流れていたのは、エントロピーと自らのライフ・スタイルの関わりをめぐる問題であったと言えよう。

「資源代替問題に対するエントロピー理論からの提言は非常に興味深いが、それを受け入れれば現在のエネルギー多消費の生活を断念しなければならない。今の生活を諦めて、循環を取り戻した時の豊かさが具体的に感じられない」といった率直な意見は、参加者の偽らざる心境の表われであろう。しかし、一方では「現代人は、石油に培養され家畜化された人間ではないか」との発言に象徴されるように、現在の「豊かさ」に対する疑問も次々と指摘された。「エントロピーなしで生きられるか」というテーマが示唆しているように、今回のセミナーの特徴は、多くの参加者の問題意識が、エントロピーの持つ自然科学的な内容の知的探求よりも、自らの住む地球生命体への不安感や危機感に立脚した「ライフ・スタイルの転換」という実践的モチーフに彩られていたことである。もとより、議論を通じて問題解決にいたる特効薬は見出せなかったが、議論を言い放しに終わらせないためにも、各自が自分自身の生活を足元からもう一度ていねいに再点検してみることの大切さが確認された。

◇

全体集会では、前半に各セクションからの演習報告、後半には全員参加によるディスカッションが行なわれた。討論では、シンポジウムでの問題提起を受け、「エントロピー的世界観からみた未来像への具体的ステップ」の問題に議論が集中した。参加者の発言には、「何からどう手をつけてよいかわからない」というとまどいも見られたが、「エコロジー問題は、南北問題や高齢化社会の問題と同じように、どこかで想像力と結びついている」（中村氏）のであり、豊かな想像力を自在に駆使して、思い切って「世界の見方を変えてみる」ことができるか否かが、問題の転回点のように思われた。

今、人間が人間らしく生きるための真の〈ニーズ〉が、問われ始めている。エントロピーからの問題提起もこうした問いと深く関わり合っている。「生産→消費→所有→廃棄」を基本構造とする消費社会のサイクルの中にあって、大切なのは、各自が「あらゆるものが流れ込んでくる生活」（暉峻氏）を確固たる足場にしながら、「立ち止まって、問いを発し、新たなものの見方を獲得してゆく能力」を回復することである。結局、「実践」とは、意識革命を遂げた一部の人間のものではなく、「身の回りにあって、自分

できることから着手する」（槌田氏）ことだからである。各自がそれぞれの生活の場で、こうした能力を自由に発揮してゆくことができるならば、自然界も含めた「共に生きる世界」の実現も、決して不可能ではないかもしれない。

参加学生の感想から

〝現代を生きる〟ことの視座を与えられて

私は今回のセミナーに参加する前に二、三の文献を読んではいたが、三日間のセミナーの前と終えた後の理解度の差の大きさに驚いた。その理由はいくつか考えられるが、まず今回のセミナーの中心テーマ「エントロピー」を扱う学者間の論争の実態がより鮮明になり、自分が真に受けていた本の内容が実はその論争の延長線上にあり、客観的真理を含むものでないことを知ったことである。といっても自然科学の多くが仮説の段階を常に越えることはないのであるが、エントロピー学会にみられる社会運動（エコロジー運動）への学問的参画や経済学へのエントロピー概念の適用の是非などの話題が入り乱れた。とくに科学の仮説や真理がどうこうといった机上の問題を越えて、今人間は何をすべきかという、現代に生を受けた私たちにとって最重要である問題へと入っていったことに、今回のセミナーは最大のウエイトを置くことになった。

巨大化する現代の科学技術が実は人間の純粋学問的興味よりも、主に先進国間の経済政策上の争いと軍拡競争に原因していることを私たちは知らねばなるまい。この勢いを押しとどめることは今のところ無理ではあるが、私たちの生活レベルからエネルギー供給や廃棄物処理などの死活問題に対応していくことは可能であろう。取り扱うテーマが私たちの生活にとってより恒久的であるほど、またより多くの要素を取り込むほどセミナーの質は高くなる。それに加えて必要なことは良質な物の見方のできる人々が集まり各人が考えるところを述べ合うことである。大学セミナー・ハウスはその必要な条件を十分に私たちに提供してくれている。少なくとも現在学生である私にとってそのように言える。

セミナー・ハウスでの生活は、ルースに暮らしがちな私にとって一大エポックであったが、それはまた人間関係の面でもそうであった。セクション演習や会食、今回の炭焼き実習などを通してご指導された先生方や参加学生の皆さん、そしてハウスの職員の皆さんと交わって得たものは今や私の生活の多くの面で新しい糧となって息づいてきている。

（東京理科大学応用物理学科3年　辻内裕）

第8回大学合同セミナー

＝主題＝ 東京の都市景観

期　日
'85.11.15～17

▼全体講義「東京の景観」
芝浦工業大学教授　石黒哲郎氏

▼セクション演習

A　都市計画と景観――画地規模と景観形成を中心として――
芝浦工業大学教授　石黒哲郎氏

B　新宿の景観――新宿の景観を支えているもの――
早稲田大学教授　戸沼幸市氏

C　都市のファサード
芝浦工業大学教授　相田武文氏

D　渋谷の街の空間構造――江戸・東京の街づくりの系譜――
法政大学助教授　陣内秀信氏

E　きわ論――景観の単位性とその領域――
早稲田大学助手　後藤春彦氏

▼イヴニング・レクチャー
水上都市幻想――ヴェネツィアと東京――
法政大学助教授　陣内秀信氏

▼運営委員
戸沼幸市氏

▼参加者　75名（内女子7名）
芝浦工業（37）、早稲田（25）、法政（11）、東京芸術（1）、その他（1）、合計4校

◇

巨大都市東京は、膨大な人口が高密度に住むために発明された道具や制度のつまった巨大な装置として休む間もなく作動している。この巨大都市は、何らかの安定した秩序を全体として志向しているのだろうか。またそのための動機が内包されているのだろうか。

東京の景観問題は、建築設計や都市計画に携わる者にとって緊急の課題となっているが、どこに切り口を見つけ、いかに切り込んでいったらよいのだろうか。物質生産の場から情報生産の場へと変貌しつつある東京が今後果たさなければならない役割とは何か。東京を自明のものとしてしまうのではなく、異邦人の目で接近し直してみることも必要ではないか。

以上の問題意識の下に共同研究の場を持とうとの呼びかけに応えて、四大学五ゼミ・七五名が参集して今回の合同セミナーは開催された。企画・運営の全般に亘りご尽力いただいた戸沼幸市氏をはじめ講師の石黒哲郎・相田武文・陣内秀信・後藤春彦の五氏のご協力に対してここに改めて謝意を表する次第である。

セミナーの冒頭、当ハウスの建築と深いかかわりをもつ戸沼氏が、何重にも引かれた線が残る当ハウスの設計図をもとに、一つの建築が完成するまでの興味深い話をされた。人間と自然が共存しながら、学び語らう空間として、このセミナー・ハウスの建築がいかに巧妙に演出されているか、建築を志す参加者に多くのヒントを与えることができるのではないだろうか。

街に住み働いている人々と都市計画に携わろうとする者との間には景観に対するイメージに、微妙なニュアンスの違いがみられるが、このギャップをどう考えたらよいか。これまで景観設計といえば、上空から見渡すようなマクロな視点からのものが主流であったが、今後は、各々の地区で生活している人々の視点からみた景観の設計が必要だろう。「バラバラ

に個性的な建物をつくるのではなく、その地域の個性に溶け込み、住民が安心して住める雰囲気をつくり出すことが建築家のプロフェッショナリズムではないかというAセクションからの報告があった。

また、ある地区の景観を設計する場合、その地区らしさとかその地区の個性というものをどう考えたらよいのだろうか。たんに、景観の美醜を論じるのではなく、その背景にある文脈を読みながら、新宿・渋谷・原宿などを例に議論した。

都市景観の重要な要素の一つにファサード（建物の正面）があるが、ファサードに占める看板の割合を比較してみると、新宿の場合、その割合は原宿に比べて多い。しかも、けばけばしい色調の看板が無秩序に配置されている。新宿は「不特定多数の人間を呼び寄せること」を目的にした街であるのに対して、原宿は「客が店を選ぶのではなく、店が客を選ぶ」といわれているように、ある程度固定した人々が訪れる街という背景がそこにはある。したがって、新宿では少しでも他より目立つ看板を立て客を呼び寄せようとする動機が働くので、いきおい看板洪水を引き起こす。しかし、だからといって法的な規制を加えることは、新宿らしさを失うことになり、得策とはいえない。むしろ「看板のデザインや色彩がより個性的なものになっていくこと」を期待すべきだ。同じように原宿が看板洪水にみまわれたら、もはや原宿らしさもなくなるのではないか、という解釈がCセクションより示された。

今後の日本の街づくりのあり方を考えていくうえで、渋谷がもっている空間構造は示唆に富む、という報告がDセクションからあった。周囲を高台に囲われ、すり鉢状の地形の上に発達した渋谷は、高台の住宅地「松濤」、谷間から開けた明治の色街「丸山町」、モダニズム時代の「百貨店」、一九六〇年代の駅前飲食店街「渋谷センター街」、そして「パルコ周辺の若者の街」など、各時代の価値観を示す地区がうまく共存している。パルコ周辺にみられる盛り場は、坂の多い土地形状をうまく利用した独自の回遊性構造をもつ。また従来の盛り場にみられたドロドロとした人間の欲望が渦巻くような闇性がなく、そこには情報によって操作された演劇的・虚構的空間が形成されている。「ポスト盛り場」としての公園通りと従来の盛り場がうまくバランスしている渋谷の街は、今後の街づくりの手法（モデル）になるのではないか。

東京砂漠、ゴミゴミとした街というネガティヴな評価ではなく、まずそこに住んでいる人々の「住みざまをみとめること」（戸沼氏）から、ある意味で世界に例のない都市として東京を「おもしろく見る」（後藤氏）こともこれからの都市景観を考えていくうえで大切なのではないか。また、ある都市の景観を考えたり、今後の街づくりを設計していこうとするとき「歴史的なパースペクティヴのもとで批判的に見る視点」（陣内氏）は欠かすことができないだろう。

こうして、議論百出のなかで大学の枠を越えて景観問題を考えていく建築学合同セミナーの第一歩が踏み出された。今後のセミナーの発展を期待したい。

東京の景観

芝浦工業大学教授　石黒哲郎

景観は文化である。都市の市民がつくり上げた文化の表現が、一つの建築になり、その集積が都市の景観を形成している。市民がいかなる生活を営んでいるのか、いったいどういう物の考え方をしているのかによって都市の景観は規定されてくる。

京島地区を再開発するにあたって隅田区役所が行なったアンケート調査では住民の圧倒的多数が「いまの街大好き」と答えた。「隣近所のつきあいはあるし、お互いに助け合っている」というわけで、いまの老朽化した建物を壊して超高層にしようという話などどこからも出てこない。ある大学で、学生にこの地区の再整備計画の図面を描かせた。学生たちは、この地区の生活に触れたときには、ヒューマンですばらしいと評価していたにもかかわらず、実際にかれらから出てきたのは高層ビルの図面であった。自分がすばらしいと感じた景観と図面に描いた超高層ビルとの間にあるこの〝開き〟は何だろうか。景観計画の難しさはここにある。

都市計画には数十年かかって営々とつくりあげる計画もあるが、いまからすぐにできる計画もある。街中に驚くべき数のすばらしいネタがほこりをかぶって見捨てられころがっている。それをわれわれは取り上げ、再発見し、表舞台に登場させることができないだろうか。

甲州街道あたりから新宿の超高層ビル群を見て、皆さんはどのように感じられるだろうか。ビルが全部重なって、豆腐を立てたように見える。私には吐き気をもよおす景観である。そこにはスカイライン・スタディが全くない。都市の景観をある意味で大きく規定していくであろうスカイラインの研究が今後のターゲットになりそうだという予感がしている。

東京の都市景観が21世紀へ向けてどう新しく形成されていくのか。一九五〇年以降、世界の大都市計画の基本理念は「抑制と分散」であった。ところが一九七〇年代以降、大都市政策はコペルニクス的転回を迫られている。即ち「集中と再生」である。いずれ「内部市街地 inner-city」問題が一つの目になるだろう。東京はモノを生産することをやめ、情報生産に携わる人だけが住む都市になるかもしれない。

（全体講義の概要＝文責・編集者）

第12回 国際学生セミナー

＝主題＝ 発展と平和のモデルを求めて
――海外体験をどう活かすか――

期日 '85.11.29～12.1

▼ゲスト講演「日本企業の国際化」
本田技研工業(株)前会長・常任相談役　杉浦英男氏

▼セクション演習

A　海外留学は何になる
放送教育開発センター教授　阿部美哉氏
共同通信文化部次長　中村輝子氏

B　海外援助と文化効率
早稲田大学教授　菊地　靖氏
国際協力事業団人材養成課長　藤村建夫氏
東京大学教授　中村英夫氏
放送教育開発センター教授　阿部美哉氏

C　海外勤務――職場と地域社会――
成蹊大学教授　広野良吉氏
朝日新聞東京本社編集委員　松井やより氏

D　日本における海外研修生の職場と生活
労働省職業能力開発局海外協力課長　木全ミツ氏

▼運営委員
成蹊大学教授　広野良吉氏
早稲田大学教授　菊地　靖氏
東京工業大学教授　熊田禎宣氏
慶応義塾大学教授　佐々波楊子氏

▼参加者　50名（内女子20名）
①国籍別（計10ヵ国）――日本（39）、マレーシア（3）、タイ・中国・フィリピン・パプア・アメリカ・カメルーン・タンザニア・フランス（各1）。
②大学別（計18校）――早稲田（11）、東京（4）、国際商科・津田塾・明治（各3）、東京農工・慶応義塾・成蹊・中央・日本女子（各2）、筑波・横浜国立・学習院・上智・帝京・日本・日本社会事業・産業能率短期（各1）、その他（8）。

◇

日本は戦後、経済の急成長と併行して国際化への機会を急速に拡大し、今日、海外へ渡航する日本人や日本を来訪する外国人は膨大な数に達している。このような外国人や異文化に「接触」する機会の飛躍的増大は、日本人の国際的視野の拡大、国際感覚の育成に何らかの影響を与えてきたことは疑いえない。しかし、その一方で日本人の大量の海外進出が、国際的な日本人の養成、国際的国家・日本の建設に直接つながってこなかったことも事実である。かえって最近では、自らの経済的「成功」の上にあぐらをかく「アロガント・ジャパニーズ（傲慢な日本人）」に対して、世界各地から鋭い批判が投げかけられ、経済力に比例しない日本人の未熟な行動にも厳しい眼が注がれている。

国際学生セミナーは、過去三回にわたって、「日本再考」、「環太平洋の課題」、「科学技術と伝統社会」をテーマに、発展と平和の新しいモデルを模索してきた。今回は、このシリーズを締め括るに当たり、副題に「海外体験をどう活かすか」を選び、どのようにしたら日本人が、「海外体験」を自らの国際感覚の強化へと結びつけてゆくことができるかを討議した。今回のセミナーが、参加者にとって自己の経験を披露、交換することを通し、日本人と日本社会の国際化のイメージを捉え直す機会となりえたとすれば幸いである。

◇

今回は、講師陣に大学の研究者ばかりでなく、財界人、ジャーナリスト、実務家、政策立案者など幅広い分野から、国際経験豊かな方々をお迎えした。また、参加者は、10ヵ国から11人の留学生を含め、総勢50人であったが、その中、青年海外協力隊OBや民間企業から社会人が8人参加したことも特徴的であった。とかく「理想主義」に陥りがちなこの種のセミナーにあって、現実の経験に基づいた社会人の発言は、話題に広がりと奥行きをもたせることになり、学生からは「理論追求と経験の尊重のハーモニーをとることが、これからの自分自身の課題」、「理念と現実の結びつきの難しさと重要性を知ることができ、大きな収穫となった」などの感想が寄せられた。

◇

初日のプログラムは、共通セッションから開始された。阿部、菊地、広野、松井、木全の各講師が、自己紹介を兼ねながらセクション演習の主題について解説され、「留学」、「援助」、「勤務」、「研修」の複数の尺度から、全体テーマへの接近が試みられた。共通セッション終了後は、藤村氏のご好意で、国際協力事業団制作の映画「キリマンジャロの小規模工業の育成」が上映され、ゆっくりではあるが、着実に現地の人々の間に浸透し、根を下し始めている日本の海外援助の具体的展開が紹介された。

◇

夕食後は、「日本企業の国際化」と題されたゲスト講演である。講師には、本田技研の国際通として知られる杉浦英男氏をお招きした。氏は、はじめに「頭の中でまとめ上げた知識ではなく、自分の皮膚から受け取ったものが、その人を作り上げる」と、「体験を積み重ねてゆくこと」の重要性を指摘。「ホンダマン」として辣腕をふるわれた三十数年のご自身の体験を例に引きながら、真の国際化や相互理解の基底にある「フェアネス

(fairness)の精神」について、以下のように述べられた。

「国際化とは、フェアネスと基本的に同じことである。結局は、人と人とのまつわり合いである以上、相手を思いやる立場に立つことが最も重要だ。理屈に合えば何をやってもいいという強者の論理ではなく、相手側の論理に対する思いやり(consideration)を持ったジェントルマンシップが、国際化を成り立たせてゆく要件に他ならない——。ひところ、盛んに日本的経営が言われたが、長年企業のトップにあった経験からすると、大切なことは、『日本的』ではなく『基本的』経営をやることだ。人間と人間の繋り合いをしっかりと作り、それに基づいて相互の信頼関係を築き上げてゆく。受け手の論理と送り手の論理をきちっと合わせることが、結局すべての基本である」。

国際協力の土台は、つまるところ基本的人間関係であり、国際化のノウハウや相手国の文化や社会に対する知識を習得することに加え、その知識を実際に自分の行動の中で「試してゆくこと」の重要性を訴えられた氏のお話は、「貴重な実体験からの真理が強いインパクトとなって自分に伝わり、とても考えさせられた」との感想に示されるように、聴衆に深い印象を与えることになった。

◇

最終日は、参加者が主体となってセミナーを総括する全体集会である。今回は二日目のプログラムがすべてセクション演習に割り当てられたため、この自由討論の場は、演習報告とそれをめぐる質疑応答を中心に進められた。各レポーターの報告は、四回にわたる演習を圧縮した密度の濃い内容であったが、特にフィリピンからの留学生の以下のような問題提起をきっかけに、活発な議論が闘わされた。

「私は、フィリピンでいろいろな国のビジネスマンと知り合いになったが、友人になれなかったのは日本人だけだ。日本のビジネスマンはビジネスだけの付き合いしかしないからだ……。私たちは、確かに日本の技術や援助を必要としている。しかし、どうかもっとあなたたちの魂や文化を持ってきてほしい。いろいろな問題を分かち合うことによって、お互いに助け合えるかも知れないからだ」。

「国際化とフェアネスは同じ」と説く
杉浦英男・本田技研工業常任相談役

報告終了後、英語で行なわれた以上の訴えに対して、フロアーから「日本人に本当にわかってもらいたいなら、与えられた制限時間内で、日本語を使ってほしい」など、コミュニケーションの仕方をめぐって注文がつけられ、参加者の間でしばしエキサイトしたやりとりが見られたが、「東南アジアから来た人で、日本人にこれほど意味のあることを言ってくれた人にははじめて会った」とのある学生の発言は、特に印象的であった。

◇

「国際」(インターナショナル)は、言うまでもなく、元々は国家「間」の関係を指す用語であった。国境を越える人々の量的拡大は、そのまま現代の国際化の質的転換へとは結びつかないまでも、もはや今日の国際化の実態が、伝統的な国家の枠組みのみでは捉え切れなくなっていることは、さまざまな市民レヴェルでの連帯運動を見ても明らかである。

映像文化やマス・コミュニケーションの発達は、大量の海外「情報」をもたらしたが、それは一面では「異文化」を当り前のことのように錯覚させ、われわれの「海外体験」をますます希薄にしてゆく危険性も併せ持っている。事実、経済の成功への過信から、自分とは違う文化や生き方をしている人間への関心を喪失し、自分の物差しでしかものを考えない「世界に通用しない日本人」も目につき始めているという。杉浦氏も指摘したように、結局「人と人とのまつわり合いを土台とする基本的人間関係が最も大事」であるとするならば、今や「国際協力とは、政府や企業、あるいは民間団体や大学、研究機関に任せておくことではなくて、真に一人一人の日本人が実行しなければならない」(木全氏)課題である。この点、「国際化の主体が他ならぬ自分自身」との認識に立って、「私たち大学生が国際化の起動力になりうるかも知れない」との全体集会での発言は、参加者が今回のセミナーから学びとったことを端的に物語っている。

国際化の主体は私たち——セミナー室での演習風景

なお、セミナーの詳しい内容については、参加学生の有志によって、現在編集が進行中の『第12回国際学生セミナー報告書』(連絡先＝企画室・0426-76-8532)をご覧いただきたい。

法人ニュース

開館20周年記念募金いよいよスタート

小山三井銀行相談役を委員長に推して募金委員会が発足

開館20周年記念事業として、当法人は国際館（International Lodge）の建設に踏み切ることになり、かねてから募金委員会発足の準備が進められていたが、財界のご支援を得て、三井銀行相談役・小山五郎氏を委員長とする委員会の陣容が整い、新年早々、その発会式をかねて第1回募金委員会が開催された。

◇

第1回募金委員会

'86年1月7日／パレス・ホテル

［出席者］（敬称略）

〈募金委員会側〉

小山五郎（三井銀行相談役）、花村仁八郎（経団連副会長）、水谷耕一郎（東京銀行協会総務部長）、大湖参治（日本証券業協会財務部長）、橋本綱夫（ソニー常務取締役）、桑原英文（トヨタ自動車総務部長）、花房利春（京王帝都電鉄秘書課長）

〈法人側〉

中川秀恭（大学セミナー・ハウス理事長）、青木生子（日本女子大学学長）、井出源四郎（千葉大学学長）、西原春夫（早稲田大学総長）、森亘（東京大学総長）、川原栄峰（早稲田大学教授）、立野晴夫（当ハウス専務理事）

◇

■国際館（International Lodge）とは

(1) わが国に対する世界の学界・教育界の関心の高まりにこたえて、各種の国際的な知的交流行事を実施する。

(2) 外国人学生、とくに中国・韓国・東南アジア諸国からの留学生と日本人学生との緊密な交流を促進する各種のセミナーを企画、実施する。

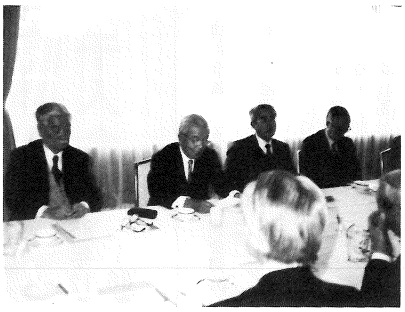
■募金目標額　三億五、〇〇〇万円

所要の資金三億五、〇〇〇万円のうち、二億五、〇〇〇万円を財界・業界の寄付に、二、五〇〇万円を個人の寄付に。

◇

なお、募金活動の開始に伴い、事務組織の一部を変更し、3月に東京事務所が開設された。

〈人事発令〉　募金事務局長　帖佐哲郎、総務課長　清水義久、東京事務所長　坂牧守。



第1回募金委員会で挨拶する小山三井銀行相談役（左から2人目）。左隣りは花村経団連副会長。

第60回理事会・第38回評議員会

'86年1月16日／銀行倶楽部

［出席者］

（理事）中川秀恭、永井道雄、天城勲、村井資長、村山松雄、飯田宗一郎、森亘、下山瑛二、崎田直次、三宅彰、小山五郎、吉識雅夫

（評議員）田中郁三、小谷正雄、川原栄峰、加納六郎、岡宏子、

委任状による者、理事8名、評議員70名。（敬称略）

◇

理事会・評議員会合同会議のため、中川理事長が議長となり審議が進められた。議案はそれぞれ立野専務理事事務代行より詳細な説明があり、すべて承認可決された。

▽評議員人事に関する件

学長交代により、東京医科歯科大学長加納六郎、東京工業大学長田中郁三、東京学芸大学長岡四郎、学習院大学長安田元久、東京外国語大学長長幸男の五氏の新任。学識経験者として前東京工業大学長松田武彦氏の新任。吉田久、阿部猛、木下是雄、鈴木幸寿の四氏の退任。

▽役員人事に関する件

東京工業大学長田中郁三氏の理事新任。専務理事事務代行立野晴夫氏の専務理事就任。松田武彦、西田亀久夫両氏の理事退任。東京農工大学長喜多勲氏監事新任。東京外国語大学長鈴木幸寿氏の監事退任。

▽開館20周年記念事業に関する件

昨秋挙行された開館20周年記念式典を中心とする記念行事の報告。国際館（インターナショナル・ロッヂ）建設のための募金について、募金委員の委嘱および第1回委員会開催に至る経過報告。併せて募金委員会内規の一部改正を提案。

法人運営委員会

□第7回　'85年10月28日／大隈会館

［出席者］川原栄峰、井早康正、宇野重昭、岡宏子、中嶋嶺雄、広野良吉、菊地昌典の諸氏。

・主な議事　開館20周年記念行事の報告／募金活動の準備状況／委員の役割分担（募金、文化活動、セミナー室の運用）。

□第8回　'85年12月6日／当ハウス

［出席者］川原栄峰、井早康正、宇野重昭、岡宏子、中嶋嶺雄、広野良吉の諸氏

・主な議事　募金活動の準備状況／担当委員の指名

□第9回　'86年2月28日／大隈会館

［出席者］川原栄峰、宇野重昭、岡宏子、中嶋嶺雄、木村尚三郎、菊地昌典、山本和代の諸氏。

（次頁4段目に続く）

千人会

'85年12月
～'86年1月

◇現在会員一、五三四名（実会員数）
（通算入会者一、七六六名）

◇新しく会員となられた方々
8名〔第82回報告（申込順）〕

C 東京学芸大学助教授 大熊 徹殿
C 千葉大学教授 中村達也殿
C 一橋大学助教授 室田 武殿
C 林業技術科学振興所 杉浦銀治殿
B 一橋大学教授 小野 旭殿
C 国際基督教大学講師 大西直樹殿
A 国際基督教大学助教授 立川 明殿
B 東京大学教授 五十嵐武士殿

◇会費ありがとうございます

藤井賢一、鶴岡義一、安達義明、米山哲夫、山本登、若林俊輔、鈴木喬、祖父江孝男、笹島恒輔、山本大二郎、中沢正和、浅見一羊、田村皖司、前田陽一、板垣與一、犬井鉄郎、伊藤玄三、森田信義、松瀬貢規、山本よしゑ、鬼塚宏太郎、金子保、川鍋正敏、八戸信昭、田島澄江、梶木隆一、宮下啓三、飯野利夫、山岡喜久男、山下幸夫、田原虎次、大神田正儀、熊川忠、矢澤修次郎、木下是雄、竹内与之助、坂口順治、森繁雄、速水佑次郎、今井哲哉、国分康孝、木村久男、小島敦子、折田正博、勝木保次、谷重雄、小松八郎、田中外次、松元文子、バッケス・ジャン、宇部栄子、福井正紀、桜井育子、柳田博明、新井益太郎、岡惺治、船山信子、納富照枝、大地羊三、岡本敏雄、飯田芳男、飯田八千代、宇野重昭、高橋浩爾、茅伊登子、川端香男里、大河内正陽、和田義信、水野伝一、小林澈郎、岡島真理、大川信明、伊藤清子、外池孝雄、内藤正、大内英吾、半谷高久、大島真、西巻正郎、田村光三、池川郁子、有山正孝、伊藤修、久場嬉子、池田温、清水護、蒲生叡輝、宮本勉、浮田久子、太田時男、高橋正男、小西正捷、慶伊富長、岡崎正、清水誠、濱川祥枝、金台烋、伊藤文人、来住正三、杉山好、大口勇次郎、杉浦銀治、室田武、中村達也、福原満洲雄、土橋信男、平木典子、竹内啓一、宮川松男、西田亀久夫、山科高康、山代昌希、椚国男、三井爲友、大塩俊介、塚本利明、佐々木邦彦、天野成光、山鹿誠次、江幡玲子、鐘ヶ江信光、平野鉄太郎、東寿太郎、鈴木謙三、清水啓三郎、吉永フミ、瀬川渡、福永正明、平松幸一、石山伍夫、高橋恒郎、外池正治、桑原哲郎、横沼健雄、三戸公、青柳総太郎、杉山吉茂、上田明子、合田信子、徳座晃子、木村康雄、伊藤学、長島正、伊藤清和、鈴木皇、大川章哉、上山碩、東川清一、高橋彰、深沢実、白井泰四郎、本田和子、望月昭一、西野万里、佐藤公子、後藤聰一、京藤哲久、青井和夫、竹林代嘉、村上泰治、鳥山英雄、水野悦子、佐藤進、徳久球雄、中富光国、石井明、佐藤公子、鈴木博、乾崇夫、石川明、武藤義夫、石井素介、遠藤健治郎、新井明、斉藤耕二、大羽滋、根岸愛子、高橋源次、山田圭一、森山俊雄、浦上要三、佐久間純郎、中鉢正美、古田勝久、茅野良男、小山弘志、小谷正雄、園田義道、相原光、篠崎武、慶谷壽信、小野寺嘉孝、木村増三、増田義男、伊藤洋、大森東亜、柳父圀近、吉川孔敏、北原文雄、山田辰雄、川喜田愛郎、桜井清彦、永島孝、北村嘉行、小林清子、小川洋輔、藤巻正生、松原元一、池井優、萩原玉味、加倉井茂樹、河田敬義、富沢賢治、上谷琢之、佐藤音彦、遠藤一郎、藤林宏一、高橋昭三、若山邦紘、小俣武夫、松元三郎、原増司、中島力、中利太郎、金子ハルオ、本田和子、八木尚志、松澤正夫、清水畏三、松山正男、磯野修、猪瀬博、玉田啓八、石井正博、本谷勲、武田昌輔、渡辺忠胤、板橋並治、高階秀爾、小川政亮、仙田哲、佐藤美喜子、岡山礼子、永積昭、平岡伊佐武、吉田耕作、師岡孝次、一丸節夫、今井清一、東洋、高村新一、光延明洋、京極純一、遠藤平治、昌谷春海、谷資信、松島千代野、山口俊夫、吉田公保、岩佐凱実、中岡二郎、井原恵治、矢田俊文、森昭彦、勢山秀子、高橋和之、安藤瑞夫、新保清子、島田外志夫、松田豊弘、板垣雄三、中村孝之、石田孝夫、新澤雄一、小泉仰、牧野誠一、笠耐、斎藤眞、高松正昭、磯直道、関口晃、平野由紀子、中村妙子、森田明、佐藤百世、馬越徹、崎野滋樹、野澤晨、蓮見音彦、本間仁、大岡信、増沢利幸、籠信義、三神勲、鈴木昭

（敬称略）

・主な議事　募金委員会の発足と東京事務所の開設の報告と具対的対策／「セミナー・ハウスでの生活」〈手びき〉の検討

昭和60年度大学教員懇談会

'86年一月23日／私学会館

〔出席者〕井早康正、小池生夫、根岸愛子、蠟山道雄、岩波一寛、佐藤保、絹川正吉、宮腰賢

（敬称略）

◇

〈主な議事〉

(1) 第22回大学教員懇談会「大学の社会的役割――問われる大学・問う大学」の実施報告

(2) 同懇談会記録の編集経過報告

(3) 『大学教員懇談会記録書』の編纂について

昨年1月25日に第1回の会合を開いた編纂委員会の四回に亘る議論の推移と今後の編集作業についての報告。各委員の分担項目＝外国語教育（小池生夫）／大学改革（佐藤保）／大学を開く（堀部政男）／一般教育（絹川正吉）／入試・学生・就職（宮腰賢）。3月下旬に原稿を持ち寄り合評合宿を予定。開館20周年記念事業の一環として二年以内をメドに刊行。

昭和60年度国際プログラム委員会

'86年一月24日／私学会館

〔出席者〕広野良吉、三輪公忠、阿部美哉、熊田禎宣、山沢逸平、M・スティール、渡辺昭夫、宇佐美滋、小松諱悦、溝田勉

（敬称略）

◇

〈主な議事〉

(1) 第12回国際学生セミナー「発展と平和のモデルを求めて――海外体験をどう活かすか」の実施報告。広野委員長から、参加者50人中、青年海外協力隊OBや民間企業から社会人8人が参加しており、かれらの果たした役割が極めて大きかった点が指摘され、社会人参加の方法、増加する海外帰国子女へのアプローチなど、その方途を積極的に検討していくことが話し合われた。

(2) 同セミナーの報告書の編集経過報告

(3) 第13回国際学生セミナーの企画について

前回で終了した4回シリーズの共通テーマにかわる新しいテーマとして、「〈国際的〉（あるいは〈開かれた〉）日本・総点検」が出された。開催期日は'86年10月24日～26日。

今年も新会員の紹介に努力します。
立教女学院短大教授　村上泰治

◇

この三月末で専任を辞任しますが、引きつづき千人会には加わらせていただきます。
明治大学教授　篠崎　武

◇千人会員からのたより◇

昭和一ケタ世代の貧者の一燈を献じます。八王子の丘の緑木のよき成長を祈りつつ。
東京大学教授　杉山　好

◇

業／務／通／信

'85年12月、'86年1・2月 年末と初春のキャンパスから

厳寒期の三ヵ月は、春を待つ季節である。卒業研究の成果と苦労を学友と分かつ「卒論合宿」が多い。大学生活最後の合宿で、教師と学生の人間的交わりはいっそう深められる。学年末試験で1月（特に後半）のハウスは今年も閑散の日が多かったが、冬休みの12月と春休みに入る2月は、多様な合宿で活況を呈した。本号でも、来泊グループと先生方のお名前は別掲の「**利用状況**」でご覧いただき、以下、各月の話題を拾ってお届けしたい。

●年末の合宿から

冬休み開始の前後を選んだ各大学の合宿で、12月の宿泊者は延べ三、六五〇人、うち会員校六二％、非会員校（大学連合を含む）二六％――大学関係の利用は約九〇％に達した。今年も週に二回の合宿――大学院と学部の「国際法演習」――を実施されたのは高野雄一・上智大教授。小池生夫・慶大教授による「留学生との交流合宿」も恒例行事の一つ。最大規模の合宿、恵泉女学園短大英文学科の「国際」セミナー（一九七名）も五年目。今回も秋田稔学長が最終日の全体討議に参加された。

'85年も多くの常連ゼミをお迎えして越年できたことを幸せに思う。東経大・色川、東外大・原、日大・瀬在、電通大・荻原の各ゼミほか一〇年以上の利用実績をもつグループが多く、早大・染谷、川原、都立大・大羽（遺伝学）の各ゼミは一九年目の来泊である。御用納めの28日まで滞在された五グループ（計一三八名）の中には、田村皖司・杉野女大教授による一週間の「教育原理ゼミ」がある。同グループも一九年目の常連である。

●新春の集会から

ハウスの仕事始めは6日。新春第一週には大小計一一グループを迎えている。'86年の〝初利用〟は東京神学大恒例（一七年目）の「教職セミナー」で、全国から教職者（牧師）や院生ら九八名が参集、二泊された。週末には五グループ（二七一名）が来泊。うち順天堂大の「新P3クラス・セミナー」（一三六名、うち教職員一九名）は今春専門課程に進む医学部新3年生のオリエンテーションを兼ねた合宿研修で、厳寒期五年連続の利用である。

各大学が学年末試験に入るので、1月の大学関係の利用は極端に少ない。この月の宿泊者は延べ一、〇五一人、宿舎の

（次頁1段目に続く）

在日朝鮮人「文学者有志の集い」の面々。左から4人目（後方）が作家・李恢成氏

今年も7月に新入生セミナーでお世話になりますが、よろしく願い上げます。楽しみにしております。

お茶の水女子大学長　藤巻正生

◇

井戸を掘った人のご苦労と志とを、いつまでも大切にして欲しいと思っています。

電気通信大学教授　遠藤一郎

◇

還暦後第一回目の誕生日、体は老化しても精神は明日を見つめて頑張っています。

公認会計士　平岡伊佐武

◇

無事に還暦を迎えました。これから一仕事する積りです。千人会のご発展をお祈りします。

早稲田大学教授　井原恵治

◇

はるか昔のご縁ですが、ニュースで伺うご発展のご様子嬉しく存じます。そのうち子供達が大学生になって新しいご縁ができるかと願っております。

元ハウス職員　新保清子

◇

昨春大学を定年になりましたので妻同伴で二週間の中国旅行、単身で約四〇日のヨーロッパ旅行をしました。

元都立大学教授　関口　晃

◇

寄付金報告

'85年10月～'86年2月

●教育プログラム資金

三〇、〇〇〇円　慶応義塾大学教授　鈴木孝夫殿

一三、九八五円　第133回大学共同セミナー参加者一同殿

一〇、〇〇〇円　第6回社会学合同セミナー参加者一同殿

一四、七〇〇円　第8回大学合同セミナー参加者一同殿

二〇、〇〇〇円　第12回国際学生セミナー指導教授　阿部美哉殿

二一、三一〇円　第134回大学共同セミナー参加者一同殿

一三、三五四円　第12回国際学生セミナー参加者一同殿

●一般寄付金

五、〇〇〇円　(財)関西地区大学セミナーハウス職員殿

五、〇〇〇円　おさひめ幼稚園殿

五〇、〇〇〇円　文学教育研究者集団　荒川有史殿

一〇、〇〇〇円　順天堂大学第5回新P3クラスセミナー殿

一〇、〇〇〇円　学習院大学教授　江沢洋殿

五、七二〇円　日本大学教授　瀬在良男殿

五、〇〇〇円　日本女子体育大学教授　河田喬夫殿

三、〇〇〇円　八王子市　関　槇子殿

●植　樹

アンズ二本　国際基督教大学教養学部殿

●植樹資金

一八、〇〇〇円　東芝AIワーキング殿

六、〇〇〇円　明星大学人文学部英語英文学科　井村ゼミ殿

●出版助成のために

第4回大学院共同セミナー記録『ヘブライズムとヘレニズム』（新地書房刊）の購入者芳名（第2回報告）

二、二〇〇円　玉川大学文学部殿

三、〇〇〇円　武蔵工業大学元学長　山田良之助殿

五、〇〇〇円　日本女子大学元学長　野見山不二殿

一〇、〇〇〇円　青山学院大学教授　羽田三郎殿

●歳末助け合い募金

「心身障害の子らに励ましのカンパを」に12月滞在の47グループからご寄付をいただきました。ハウス職員からの分と併せて、一〇万一、九九二円を、暮28日に島田療育園に届けました。ご協力に感謝します。

――フロント係

稼働率は一五％。特に閑散となる1月後半に、八年連続の利用で来泊されたのは高階秀爾・東大教授（大学院「美術史ゼミ」）である。

●立春とともに合宿再開

そして立春を境に、セミナーの丘に俄然活気が戻る。学年末試験から解放された私立各大学の合宿が再開されるからである。学生が事実上の春休みに入るこのあたりから3月にかけ、ゼミも課外諸活動も学年末の合宿で一年を締めくくり、新しい学年に備える。卒業を間近にひかえての合宿も少なくない。昨年に続いて2月の宿泊利用者は延べで四、〇〇〇人を越え、稼働率も五三％に達した。

2月の中旬、中央庭園（本館と交友館の中間）「梅小路」入口のしだれ梅がほころび始めた。新澤雄一・早大教授の先年の植樹によるものである。たまたま新澤ゼミ（一八名）が卒業論文の最終発表で二泊された。遠からぬ春を告げる紅梅は、明るい日差しの中で、卒業組一人ひとりを祝福するかのようであった。新澤教授とセミナー・ハウスとのご縁は、同教授と吉阪隆正・早大教授との出会いに始まる。吉阪教授がハウスの設計を依頼されて、理念の具現化を構想中の'64年（開館前年）のことである。本号の「わたしたちの合宿」（**下掲**）に寄せられた新澤教授の一文をご覧いただきたい。

わたしたちの合宿

セミナー・ハウスと私

早稲田大学教授　新澤雄一

私が「八王子のセミナー・ハウス」という言葉を知ったのは、二二年前の昭和39年4月、たまたま机を並べていた建築学科の吉阪隆正先生からであった。先生はマスプロ化している大学の現状とは全く異なった理想から、都心から必ずしも遠くない八王子の、秩父・関東・丹沢山地に囲まれた閑静にして雄大な多摩丘陵の恵まれた自然環境のなかで、国公私立を問わず、教授と学生とが一体となって自由に思索し議論し研鑽を積むことのできるセミナー・ハウスを建設する構想が進行中であると話された。私のように住いの近くに、「兎追いしあの山、子鮒釣りしあの川」とて無い東京生まれの者にとって、戦前から日帰りで高尾山や三ツ峠などに遠足するとき通過する八王子は故郷のような街であった。

吉阪先生は、セミナー・ハウスの本部建物がこの画期的構想の中心を象徴するように、「楔を大地に打ち込むような構想のもとに設計している」というお話しをされた。やがてそれが現実のものとなり、昭和40年7月に開館し、私共は41年2月、セミナー・ハウスで卒業論文の最終発表のため予定どおり二泊三日の合宿を行なった。

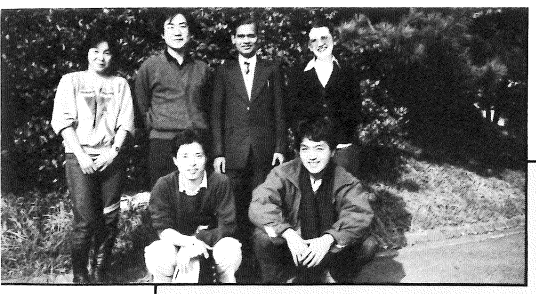
何故予定どおりかというと、前の年に申し込んだ時点では早稲田のキャンパスは表向きにはまだ平穏であったが、「授業料値上げ問題」と「学生会館の管理運営問題」とがこじれて、1月の正月休み明けに各学部学生会はストライキを宣言、全共闘を結成し、全学を巻き込んだ、いわゆる大学紛争に発展したからである。大学の対応が必ずしも適切でないためか学年末試験は勿論、卒業、進級の目処の立たないままキャンパスは荒廃を極め合宿どころではなかったからである。

幸いなことに紛争中も私のゼミの学生は冷静に対処し、時間の余裕をみては計算室で卒業論文の仕上げをしていた。予定どおりの発表を終え、打ち上げコンパをし、深夜床に就いたが、早朝数人の代表が私の部屋へ来て「昨晩みんなで徹夜して議論したが、学生会館の管理運営問題はいわゆるセクトの争いの様相が強くて、紛争の理由にはならない。また授業料値上げ問題は、大学側にも学生側にもそれぞれ理屈があって、どちらが良いとも悪いとも言えない。しかしながらこの問題に関わりない受験生を巻き添えにするのは良くない。大学当局も学生も社会的な責任を自覚すべきである」と言い、「我々は中止されそうになっている入学試験が出来るように、全共闘によって荒らされた試験場の整備を学校に申し出て良いか？」と問うたのであった。勿論これに反対の学生もいたが、「この提案に賛成する者も反対する者も、自らの信ずるところに従い行動をして良いが、自説と違うからといって争わぬこと」「試験場を設営中に暴漢が襲って来たら、無抵抗で身の安全を第一に逃げること」を条件に学校へ申し出ることを許した。

ある者はその日の午後故郷へ帰り、ある者は大学へ行って荒らされている試験場を整備した。後日大学当局者から「学生全体が大学から離れてしまったと思い、何をして良いか途方に暮れていた大学にとって、一人でもこういう学生がいるのかということが分かって勇気付けられ、これを契機に収拾の方向を模索しはじめた」ということを聞いた。紛争が収まって大学は何を勘違いしたのか「手伝ってくれた学生にアルバイト料を差し上げる」と言ったが、学生たちは「大学の社会的責任を果たしたまでで、アルバイトをしたのではない」と、アルバイト料はそっくりそのまま学部に寄付し、それが元で商学部奨学基金が作られた。

歴史には「もし」は禁句であるが、敢えて「もし」と言わせて戴ければ、「もしセミナー・ハウスが無かったならば」「もし私の学生がセミナー・ハウスで合宿をしなかったならば」紛争はきっと違った方向をたどっていたかもしれないとも思うのである。セミナー・ハウスの生活は何も本を開くことでも、発表をすることでもない。ちょうど二〇年前の2月、大学を、社会を、国家を真剣に憂い徹夜をして議論した学生がこのセミナー・ハウスにいたのであった。

2泊3日の卒論発表合宿を終えて（中央が新澤教授）――第2セミナー室



都立大学の生物学科では，毎年秋に学科をあげて大学セミナー・ハウスでセミナーを行ないます。私が遺伝学研究室に行くのを決めたのも，この時でした。大学セミナー・ハウスは，私にとって自分の将来を決める上で非常に大きな役割を演じてくれました。（**東京都立大学遺伝学ゼミ・櫛田恒治**）――**上掲写真は今春卒業組（前列右が櫛田君）と留学生たち（後列右からウルグアイ，インド，韓国）**

私の大学生活とセミナー・ハウス

私の大学生活には数々の思い出があるが，中でも，毎年２月に行なわれる大学セミナー・ハウスでの合宿はこの上もなく有意義なものであった。

大学での普通の授業の時では，時間が限られているため，どうしても議論が中途半端で終わってしまうことが多い。私の所属した平野ゼミでは，その時間的不足を補う目的でこのセミナー・ハウスでの合宿が企画されている。グループ作業と議論に時間が不足することがないように組まれている。それでも時間が足りなくて，夜を徹して与えられる課題に取り組む。討論開始の寸前まで時間に追われた真剣な準備が続く。

集中して時間がとれたこと，メンバー間の親密さが増したこと，議論を出し尽くせたこと，そして先生から十分な指導を受けられたこと。このような充実した生活を体験できたことに対して，平野先生の配慮と準備に感謝しなければならない。またこの大学セミナー・ハウスを，何よりも学生の本分を全うさせるように運営されている，理解ある職員の方々のお蔭でもあると思う。

私はこの４月から，公立高校の教師として教壇に立つ。教育においては，学生のやる気は確かに必要だが，それを引き出してくれる教師の情熱，そしてこのような施設的環境が不可欠であると思う。現実にはさまざまな障害があって，困難だとは思うが，この大学セミナー・ハウスで私が体験できた教育を，いつか高校生にも体験させてやりたいと思っている。（**横浜商科大学平野文彦ゼミ・岡田実**）

利用状況

＊＝同月２回利用
＊＊＝同月３回利用
日帰り利用を除く

■12月（95グループ、延三、六五〇人）

東京都立大学教授　倉沢　進
明治大学教授　横田　澄司
法政大学教授　田中　義久
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京理科大学教授＊　狩野　紀昭
千葉大学教授　中村　達也
東京都立立川短期大学教授　吉田　幸弘
日本大学教授　瀬在　良男
上智大学教授＊　高野　雄一
東京電機大学教授　八木澤壮一
東京都立大学教授　伊藤　直明
東京都立大学助教授　国井　隆弘
明治大学教授　松瀬　貢規
日本大学教授　高瀬　暢彦
東京都立大学教授　下山　瑛二
中央大学教授　木内　宜彦
中央大学教授　下村　康正
中央大学経済学会
成蹊大学文学部文化学科Ⅱ類卒論オリエンテーション合宿
東京都立大学助教授　日向野幹也
青山学院大学教授　佐藤　和男
学習院大学教授　北村　公彦
中央大学教授　五井　一雄
東京都立大学教授　大羽　滋
早稲田大学教授　染谷恭次郎
法政大学教授　田中　尚夫
電気通信大学教授　荻原洋太郎
早稲田大学教授　川原　栄峰
早稲田大学教授　鴨　武彦
東京都立大学教授　伊藤　文人
東京大学教授　坂部　恵
大妻女子大学教授　昌子　武
東京都立大学教授　峰岸　純生
慶応義塾大学教授　小池　生夫
横浜国立大学教授　市川　博
早稲田大学平澤研究室
一橋大学助教授　神武庸四郎
東京都立大学教授　山崎　康男
東京都立大学教授　飛田　満彦
東京都立大学教授　磯部　力
東京学芸大学特殊教育学科
恵泉女学園短期大学英文学科総合講座「国際」合宿セミナー　片山　覚
早稲田大学助教授　石丸　晶子
東京経済大学教授　島薗　進
東京外国語大学講師
中央大学教授　飯野　利夫
東京外国語大学教授　原　誠
東京都立大学教授　山住　正己
早稲田大学エクステンションセンター　山野　康美
明治大学講師　太田　卓
法政大学教授　小林　宏晨
上智大学教授　色川　大吉
東京経済大学教授　吉田　倬郎
工学院大学助教授　藤澤　好一
芝浦工業大学助教授　山下　幸夫
中央大学教授　渡辺　勉
武蔵大学教授
東京都立大学高分子研究室ゼミ　金澤　孝文
東京都立大学教授　清宮　懋
東京都立大学助教授　金谷　憲
東京学芸大学助教授　山川　仁
東京都立大学講師　松原隆一郎
東京大学助教授
慶応義塾大学霞会
芝浦工業大学教授　十代田知三
杉野女子大学教授　田村　皖司
東北学院大学助教授　山崎　和郎
新潟大学教授　長塚　康弘
立正大学教授　厚東　偉介
第12回国際学生セミナー
現象学解釈学研究会
第134回大学共同セミナー
国際学生シェイクスピア連合
国際経済商学学生協会
日本ＯＲ学会
在日朝鮮人文学者有志の会
日本ナチュラリスト協会
全国到達度評価研究会
文学教育研究者集団
キリンビール
日本エルシーエー東京支社
酒井薬品
興亜火災海上保険
ベルモント化粧品
アイワールド
エンジニアリング振興協会
東芝日野工場
日本電気＊
日本電気コストコンサルティング
〔個人利用〕
経済春秋社　佐藤　誠治
東洋大学教授　堀　光男
明星大学スクーリング生　村上晴美

■1月（38グループ、延一、〇五一人）

東京都立大学教授　稲垣　寛
東京大学講師　小和田　恒
東海大学教授　師岡　孝次
早稲田大学教授　徳久　球雄
順天堂大学医学部新Ｐ３クラスセミナー
東京都立大学教授　二村　敏子
東京都立大学助教授　大塚啓二郎
青山学院大学助教授　岩崎　三郎
明治大学教授　由井　常彦
東京大学教授　高階　秀爾
東京外国語大学助教授　田島　信元
早稲田大学講師　松崎　義徳
東京理科大学教授　狩野　紀昭
東京外国語大学助教授　清水　透
東京農工大学生協組織部
文教大学海外交流オリエンテーション
東京神学大学第17回教職セミナー
チトクロームＰ450研究会
松沢教会
国際不動産
日電アネルバエンジニアリング
小松ゼノア
日本電気＊＊＊
花王化粧品東京
小西六写真工業
アイワールド
町田市堺農業協同組合＊
多摩中央信用金庫
精琴堂楽器店
積水化学工業
〔個人利用〕
一橋大学教授　石　弘光
トラベノール　丸山　健
一橋大学大学院生　矢部　広重
杉浦　秀一

■2月（95グループ、延四、〇〇五人）

明治学院大学教授　尾崎　朔
明治学院大学サークル連合会文化団体委員会
東京電機大学自動制御研究部
中央大学教授　山本　武利
法政大学講師　村井　久二
中央大学教授　椎橋　隆幸
中央大学講師　柴　宜弘
聖心女子大学ＥＳＳ
青山学院大学教授　佐藤　節子
聖心女子大学文芸部
駒沢大学教授　中原　章吉

武蔵工業大学体育会リーダースキャンプ
慶応義塾大学教授　小泉　仰
慶応義塾大学ワグネルソサイエティ合唱団
中央大学夜間部学生自治会
東京女子大学カレッジストリングス
中央大学インナー実行委員会
成城大学茶道部
武蔵大学講師　増田　實
明治大学教授　原　正彦
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
慶応義塾大学霞会＊
駒沢大学美術部
中央大学教授　池田　正孝
早稲田大学管理工学研究会
明治大学教授　牧野　誠一
青山学院大学教授　寺東　寛治
横浜国立大学教授　天川　晃
武蔵大学体育連合会リーダースキャンプ
早稲田大学教授　新澤　雄一
早稲田大学国際学生友好会
成蹊大学管弦楽団
学習院大学シェイクスピア劇研究会
東京都立大学教授　金子ハルオ
東京都立大学教授　鳴澤　實
東京都立大学教授　桐谷　維
中央大学経理研究所会計学研究会
工学院大学助教授　加藤　尚武
東京都立大学助教授　日向野幹也
東京都立大学社会学研究室
明治学院大学教授　筒井　正明
横浜国立大学助教授　青山　護
横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
成蹊大学文化会リーダースキャンプ
武蔵大学教授　武内　清
慶応義塾大学英語会
和光大学教授　藤井　清
拓殖大学講師　大倉　正雄
横浜商科大学助教授　平野　文彦
東洋大学教授　藤木三千人
国士館大学講師　石川　博明
武蔵野女子大学学生自治会執行部
女子聖学院短期大学ＣＣＦ
女子聖学院短期大学聖歌隊
中神小学校朗読研究会
中央大学受験生
日本学生経済ゼミナール東京部会
全関東学生商業英語連盟
東京都三多摩勤労者山岳連盟
万国ローアバプテスト福音伝道協会
東京カウンセリング・スクール
アストン会
日本伝道者協力会
文部省総合研究(A)グループ
都高教七支部青年部
日本山岳協会
東京松本英語専門学校
オリエント時計労働組合＊
久光製薬
町田市堺農業協同組合
富士電機
日本電気＊
日本フードサービス協会
日本生産性本部
千野製作所＊＊
小西六写真工業
ヤマザキ製パン従業員組合武蔵野支部
酒井薬品
日本分光工業
調布神代農業協同組合
日本リニアック
岩崎通信機
日本郵船
システムマネジメント
日野市役所
〔個人利用〕
共立女子大学学生
高山　良子
中村工業
渥美　靖夫

新年度の利用料金は据置きです

4月からの利用料金はひとまず据置きといたします（3月の理事会決定）。昭和58年度以来4年連続の据置きで、会員校学生一人当りの一泊三食の料金は三、八〇〇円です（泊数に関係なく、別途、三〇〇円の施設改修協力金も従来どおり）。

もとより会員校はじめ利用者の方々の負担をできる限り軽く、との従来の方針に基づくものですが、年々増加する支出をまかない、経営の健全性を確保するためには、利用者増をはかることが必須の条件となります。年間を通しての、なお一層のご利用を切にお願い申し上げます。

●予　告●

●第136回大学共同セミナー

主題　文学と風土――日本文学の特殊性と国際性――
期日　1986年5月23日～25日（金～日）
募集人員　約70名（社会人も参加可）

◇全体講義
風景の成立――「近江八景」をめぐる比較文化史――
東京大学教養学部教授　芳賀　徹氏

◇ゲスト講演
地方と普遍をめぐって――ダンテと井伏鱒二――
作家　大江健三郎氏

◇セクション演習
A．坐俗の文学と立俗の文学
早稲田大学文学部教授　野中　涼氏
B．近代日本文学における土着的要素
東京女子大学文理学部助教授　大久保喬樹氏
C．古典芸能の特殊性と普遍性
――特に能を中心として――
筑波大学文芸・言語学系教授　田代慶一郎氏
D．俳句と季語――歳時記の意味とその行方――
武蔵大学人文学部教授　仙北谷晃一氏

運営委員　日本女子大学一般教養部教授　鈴木和子氏
東京大学文学部教授　川端香男里氏

●第7回大学院共同セミナー

主題　人間性と犯罪
期日　1986年7月4日～6日（金～日）

◆運営委員
筑波大学社会医学系教授　小田　晋氏（精神衛生学）
上智大学文学部教授　福島　章氏（精神医学）

●第137回大学共同セミナー

主題　生命倫理を考える（仮題）
期日　1986年11月14日～16日（金～日）

◆運営委員
青山学院大学経済学部教授　坂本百大氏（哲学）

◇問い合わせ先＝企画室　☎0426-76-8532〈直通〉

○○編集後記○○

思いがけない彼岸の大雪で、キャンパスの樹木は少なからず被害を受けました。環境整備の職員が倒木や折れた枝を丁寧に片付けていますが、卒塔婆のように裂けた杉の木立が無惨です。それでも4月は幾種類もの桜花が次々と咲き乱れる季節であることは変わりません。雑木林に点在している山桜の風情は格別です。

本号は、昨年12月の第134回大学共同セミナー「エントロピーなしで生きられるか」に紙面を割きました。炭焼きの体験実習は、キャンパスの豊かな自然と向き合うことのできた一時でしたが、雑木林に流れる薄紫の煙、いぶされて衣服にしみた煙の臭いの中に、この数十年間で私たちが失ってしまった〈生活のリズム〉がありました。（能）

表紙の写真＝本館ブリッヂから国際セミナー館を望む

「セミナーハウス」一九八六年四月二五日号　発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一九二―〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六―七六―八五一一　振替口座　東京五―七四五九〇番／編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝中川秀恭／製作＝中央公論事業出版